寒地におけるバラの作り方

日本バラ会北海道支部副支部長
佐藤正三

はじめに

北海道のような寒地でもバラの栽培が可能である。すなわち函館や札幌はもちろんのこと、厳寒地といわれる帯広・旭川・名寄から、北は稚内・礼文島、東は釧路・根室・知床半島にいたるまで、北海道のほとんど全域にわたってバラが咲いている状態を、筆者は実際に自分の目で確かめている。

本州に比べて一般に樹高が低く、一株の着花数も少ないというきらいはあるが、他面花色があざやかであり、病虫害の種類も著しく少なくなっているという利点がある。問題は越冬法であり、各地域に適した越冬法さえ確立されるならば、ほとんどの品種の栽培が可能であるといってよいであろう。

なお昨秋十月上旬に、東京で催された英国フェアのバラのコンテストで、北海道・弘前・盛岡など寒地のバラが上位入賞を独占したという実績があり、寒地のバラ栽培家たちは大いに自信を深めた次第である。

露地植えの経過

寒地におけるバラ栽培の特殊性を紹介する意味で、旭川地方を例にとり、露地植えの年間経過を略記すると次のようになる。

三月下旬～四月上旬（融雪期）

二年苗の到着、仮植え。

越冬苗の囲いはずし、立て起こし、霜除け。

四月下旬～五月上旬

二年苗、越冬苗の定植、剪定、霜除け。

五月上旬～六月中旬

消毒・追肥（七～十日ごと）五月中旬まで晩霜対策。

六月下旬～七月上旬（開花期）

消毒・追肥中止。展示会は六月二十五～三十日ころがよい。

七月中旬～七月下旬

消毒・追肥（七～十日ごと）仮剪定。

七月三十日～八月三日

夏の剪定

八月上旬～九月上旬

消毒・追肥（七～十日ごと）

七月中旬～九月下旬（開花期）

清毒・追肥中止。展覧会は九月十五～二十日がよい。

九月下旬には降霜をみることがある。

十月いっぱい

対寒力を強めるためにNを控え、PとKを主に追肥（七～十日ごと）。消毒。下旬には初雪が降る。

十一月上旬

冬囲いを完了。

中旬から根雪になることがある。

すなわち、東京付近にくらべて春の開花が約一ヵ月遅れ、秋の開花が約一ヵ月早いこと、およびバラの生育期間も四月下旬に植え付けてから十月末に冬囲いにはいるまでわずか五ヵ月に過ぎないこと—などが大きな特徴といえよう。

なお釧路や根室では霧と夏の低温のため、最初の開花がこれよりも一ヵ月近く遅れるのが普通である。

写真1　寒地のバラ園　（旭川市太田善明氏宅）
ポール作りのツルバラはインスピレーション，ハンバーガー・フェニックス，ハイヌーンなど。いずれも「横倒し法」で越冬させている。

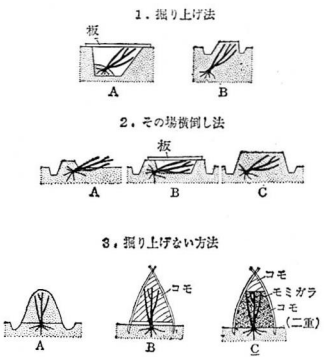
越冬法の実際

北海道では、バラを防寒しないで露地で越冬させた場合は、たいていは凍害を受け、はなはだしい時は地上部が全部枯死してしまう。寒地のバラ作りで最も重要なことは、その地方に適した越冬法を確立することである。越冬法を分類すると次のようになる。

(1)掘り上げて囲う方法
　(A)ざんごう法　(B)土で被覆する方法
(2)横倒し法
　(A)無被覆法　(B)板で被覆する方法　(C)土で被覆する方法
(3)掘り上げない方法
　(A)土まんじゅう法　(B)コモ包み法　(C)モミガラ充塡コモ包み法

これらの越冬法のうち、初心者にも容易に、しかも確実に冬越しできる方法を、地域別に解説する。

道南地方（函館付近）



第1図　いろいろな越冬法

コモ包み法—軽度の越冬法である。この地方では凍害のおそれはあまりないから、冬囲いも、雪による枝折れを防ぐ程度でよい。雪でつぶされないようにじょうぶな支柱を用いること、むれないようにすそをすかしておくこと—などが留意点である。

道央地方（札幌付近）

横倒し無被覆法—中程度の越冬法である。倒す側の根もとの土をとりのぞき、反対側の根の一部を切って押し倒し、浮き上がった根の部分にだけ土を盛る。この上に積もった雪が布団代わりになって凍害を防いでくれるわけである。札幌市内でも、場所によっては、次に述べるような強度の越冬法を用いた方がよい場合がある。

道北・道東地方

（旭川、名寄、稚内、帯広、釧路など）

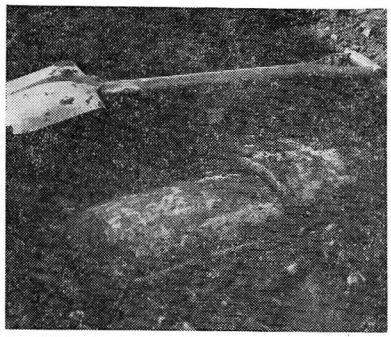
強度の越冬法を必要とする地域である。

ざんごう法—地上四〇～五〇㌢に刈りこんだ苗を掘り上げ、深さ四〇㌢ほどのみぞに斜めに倒し、根もとにだけ土をかけ、みぞを板でおおう。一㍍×二㍍のざんごうで三〇～五〇株を囲うことができる。最も確実な越冬法であり、作業も案外簡単なので、厳寒地の越冬法として特に推奨したい。ざんごう内に融雪水が停滞しないように排水のよい場所を選ぶこと。雪の積もらない地方ではざんごうの深さを五〇㌢㍍ほどにし、板の上に二〇㌢㍍ほど土を盛ること—などが留意すべき点である。

横倒し土被覆法—あらかじめ枝を軽くしばり、倒す側に浅いみぞを掘り、そのみぞに苗を押し倒し、根もとだけではなく、株全体に土を盛る。完全に冬越しさせることができるが、春になって立て起こす際に、芽を欠かないように注意を要する。

横倒し板被覆法—横倒しにした株に板をかける。板の代わりにトタンでも屋根ガワラでもよい。「土被覆」の場合よりもやや深いみぞを掘ること、板の上に軽く土を盛ること—などが留意点である。旭川ではコクテールのような比較的耐寒性の弱いツルバラでも、この方法で完全に越冬し、毎年見事な花を無数に咲かせてくれる。その場倒しなので根をあまり損傷することもなく、また春先に立て越こすのも楽なので、厳寒地のツルバラの越冬に適した方法である。

どの越冬法の場合でも、囲う前に葉を切り除き、さらに石灰硫黄合剤かダイセンなどで消毒することが望ましい。葉が付いていると越冬中に葉が腐り、それが茎に伝ぱすることがあるからである。同様の理由で、茎を結束する材料も、わらなわよりはビニールひものような腐らないものがよい。



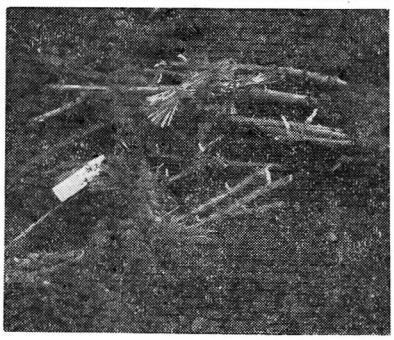


写真 2　HT系の越冬の例

「横倒し板被覆法」の変形。上の写真は盛り土を除いて屋根ガワラを出したところ。下の写真は屋根ガワラを除いて，拝み合わせに横倒しにした2株のバラ苗をみせたところ。芽が伸び出している。(4月10日，旭川市の筆者宅で撮影)

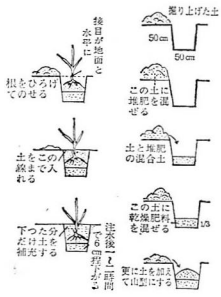
定植と剪定

一　定植の時期　本州では二年苗を秋に定植するのがよいとされているが、北海道では前に述べたような理由で四月中・下旬に植えるのがよい。「ざんごう法」や「横倒し法」で越冬させた場合、四月上旬になると芽がすでに動き出しているために、定植時まで放置しておくと芽の向きが変になってしまう。これを避けるためにあらかじめ越冬苗を立て起こしておき、かつ霜害を防ぐために夜間はおおいをする必要がある。

二　基肥の施し方　道南地方では秋に掘り上げる必要がないから、本州のように植え穴の底深くに基肥を入れてよいのであるが、旭川のように特殊な越冬法を用いる地方では、基肥についても特別な配慮を要する。すなわち㈠毎年掘り上げて冬囲いをする場合は、堆肥と土の「和えもの」を作ってしまった方がよく、㈡一部の根を切って横倒しにする場合には、春に立て起こす際に、株の周囲にたくさんの基肥を施すようにした方がよい。いずれの場合も未熟の肥料で根を痛めないよう注意を要する。

三　剪定と整枝　強度の越冬法を必要とする地方では、根と地上部とのバランスをとるために「超強剪定」をする。㈠冬囲い前に地上四〇～五〇㌢㍍に切り縮める。㈡四月下旬定植の際に、伸びた芽の方向を考慮しながら三〇～四五㌢㍍に切り込む。㈢七月上旬夏花が終わったら、それから三週間ほどは摘蕾したり、細い枝やこんだ枝を整理して枝を充実させる。㈣七月末から八月初めにかけて、再び四〇～五〇㌢㍍に切り込むと、約四十五日後の九月十五日ころに秋花が咲く。

ツルバラの場合は、越冬中にどうしても枝先が凍害にやられるので、春にその部分を切りとる程度でちょうどよくなる。



第2図　旭川地方における二年苗の定植　堆肥と土の「和え物」を作るところが特徴

病　虫　害

旭川地方で普通にみられるバラの病虫害には次のようなものがある。

病気…ウドンコ病、黒点病（比較的少ない）、枝枯れ病、ボトリチス、根頭ガン腫。

害虫…ハマキガ類、ハキリバチ、コガネムシ類（マメコガネが多く、ハナムグリはほとんどみられない）、アブラムシ、ハダニ。

本州に比べると、黒点病がほとんど問題

にならないほど少なく、クキバチがみられないことなどが特徴である。したがって実際問題としてはウドンコ病とハダニの防除対策に重点を置けばよく、病虫害防除の点では恵まれているといえる。

参考までに筆者が常用している消毒液の処方を掲げる。

ダイセン水和剤（病害一般）……20g
ウエッタブルサルファー（ウドンコ病）…20g
エストックス乳剤（アブラムシ）…5cc
テデオン乳剤（ハダニ）……5cc
エンドリン乳剤（ガ類幼虫）……10cc
水……10ℓ

一〇ℓの消毒液で約一〇〇～二〇〇株の消毒ができる。開花期以外は、七～十日ごとの薬かけを必ず励行することが、バラ作りを成功させる秘けつの一つである。

その他

一　ツルバラの問題　北海道では中輪系や小輪系のツルバラはよく咲くが、大輪系のツルバラは一般に花つきが悪く、特にCLピースの花つきが悪い。旭川ではこのCLピースの地上部が完全に越冬するように、また、根もなるべく損傷しないように念を入れて栽培しても、木が大きい割に花つきが悪く、九年間作りこんだ株でもよくいった年でせいぜい三〇輪程度しか咲かない。札幌でもこれと似たものである。筆者は数年前、青森県五所川原市の津島歯科医のバラ園で、三〇〇輪ほども開花するCLピースの大株を見て驚嘆したことがある。

旭川や札幌でもよく咲くツルバラとしては、コクテール、ハンバーガー・フェニックス、ダンス・ド・フュー、ドンファン、フォイル・メール、ゴールデン・シャワー、フラウ・カール・ドルシュキー、インスピレーション、ハイヌーン、マダム・バタフライ、サッタース・ゴールドなどがあげられよう。このうち特にコクテールとハンバーガー・フェニックスの二品種を推奨したい。ハンバーガー・フェニックスはもともと耐寒性の強い種類であるから問題にならないが、コクテールの耐寒性は決して強いものではなく、横倒しにしたままの越冬法では、地上部のほとんど全部が凍害にやられてしまうことがある。しかしこれを浅いみぞに倒して板でおおっておくと完全に越冬し、しかも花つきが非常によい。北海道では、特殊な越冬法を用いれば、耐寒性の強弱はあまり問題にしなくてもよい。それよりもむしろ花色や花つきのよい、しかも四季咲性の強い種類を選ぶべきであろう。

二　バラ展開催期について　昭和三十九年の、各地における最初の開花期を別表にまとめてみた。

東京	五月中旬～五月下旬
仙台	五月下旬～六月上旬
盛岡	六月上旬～六月中旬
函館	六月中旬
札幌	六月中旬～六月下旬
旭川	六月下旬～七月上旬
士別	七月上旬
北見	七月上旬～七月中旬
釧路	七月下旬～八月上旬

この表からもわかるように、春バラ（北海道では夏バラ）を北海道から東京のバラ展に出品することは、航空便を用いたとしても不可能なことである。しかし北海道内では、六月二十五日から七月五日ころに展覧会を開けば、特別な地域以外は参加できる。

秋バラの方は剪定時期によって開花期をコントロールできるのであるから全道バラ展が容易に開けるはずである。ただし道東・道北地方では九月末になると降霜のおそれがあるので、全道バラ展は、一般的には九月十五日からおそくとも九月二十五日ころまでにすべきであろう。前にも述べたように、昨秋十月初めに東京で開かれた英国フェアのバラ展には、盛岡、弘前、北海道から優秀な花が出品されているのであるから、ビニール屋根などで保護することにより、九月末に東北・北海道を一括した「北日本バラ展」を開催することも、あながち不可能なことではないと考えられる。

三　ビニール屋根について　バラ園全体としてながめる場合は別であるが、一輪一輪の花を大事に咲かせたい場合には、ビニール展根を利用することはきわめて効果的である。

㈠ビニールハウス内に地植えにする場合㈡はちバラをビニールハウスに随時出し入れして保護する場合、㈢露地植えのバラに開花期だけビニール屋根をかける場合―などあるが、近年旭川地方では㈢の方法が盛んに試みられている。つぼみが色づくころに、温床用のビニール障子をバラ園の全部または一部にかけるのがよい。開花期だけ使用するので茎葉が徒長することもなく、花弁が雨露や霜の害から完全に守られた、きわめて優美な花が得られる。屋根を載せる骨組は、旭川では一寸五分角（四・五㌢角）の角材で十分に間に合うようである。

なお根室管内の標津町の中川定一氏は、バラ園の周囲を一㍍ぐらいの高さのヨシズで囲い、中間部はすかし、上をビニールの屋根でおおう方法によって、道東地方としてはまれに見る見事なバラを咲かせていた。海岸で潮風による塩害に悩まされる地方では、植え付け当初からヨシズのようなもので側面を囲い、さらに開花期近くになってビニール屋根をかけて花を保護する方法は理想的なものであると考える。稚内地方なども、このような方法を講ずることにより、いわゆるコンテスト花を得ることができるのではなかろうか。

おわりに

紙数のつごうもあって、肥料の問題や、はち植えの方法などについての記述はいっさい省略し、もっぱら寒地のバラ作りの特徴に主眼をおいて述べた。

一口に寒地といってもその範囲は広いものであり、したがってバラ作りの方法も地域によって異なることは当然である。要は各地に適する越冬法を確立し、これに見合った管理をすればよいわけである。さらにはビニール屋根、ビニールハウスなどの利用を導入し、より優美な花を咲かせる試みが続けられていることを付記して稿を終える。

（北海道教育大学旭川分校助教授）